

60年ぶりの雪とともに ■松田 凡

古参の会員はご存じだと思うが(私もそんな言い回しをする年齢になってしまった)、日本ナイル・エチオピア学会の特徴の一つとして、学術大会の開催地を選ぶ際に、地元団体との協力をはかりつつ開催するというポリシーがある。この一文を書くために、改めて当学会が発行してきた「JANESニュースレター」をNo.1(1992年)からNo.19(2012年)まで、研究室の本棚から取り出してざっと目を通してみた。開催された学術大会とその場所を見ているとそれぞれに思い出深い、中でもやはり、2002年に岩手県にある(旧)前沢町立牛の博物館で開催された第11回大会、2003年の土佐市民会館での第12回大会、2005年の千曲市の戸倉創造館での第14回大会は、開催場所が大学ではないという点だけではなく、共催団体や公開シンポジウムのテーマという意味で記憶に残っている。

今年度(2013年度)の第22回大会は、宮城県石巻市の石巻専修大学で開催させていただいた。ご多忙中、当大学の学長で大会会長をお引き受けいただいた坂田隆先生には、心から感謝を申し上げたい。詳しくはこのニュースレターの中で紹介されているのでそちらに譲るが、学会発足以来20年以上がたち、「地域学会」のあり方を考えさせられる大会だったと思う。

いうまでもなく、石巻とその周辺地域は、2011年3月に起きた東北地方太平洋沖地震で大きな被害を被った場所である。石巻市は浸水による被害面積が最大級(大槌町に次ぐ)、となりの女川町は市人口に占める死者・行方不明者の割合が最大と聞いて、改めてこの場所に立つことの重みを実感した。そして、この地で本学会を開催する意義について、特定地域に対する学問的関心にとどまることなく、できるかぎりの想像力をめぐらせ、地域どうしを結びつけるグローバルな発想を持つことを、私たちが確認することにあると考えた。とはいえ、何事かを声を大にして叫ぼうというのではない。人びとの暮らしへの細やかな共感を土台とした「地域への愛」を、学問研究をする根底に持っていたいということである。

大会開催の前日、石巻駅に近い商店街の寿司屋で夕食を取りながら、店主の方に震災当日のお話を聞く機会があった。あの日からおよそ1週間、冷蔵庫にある食べ物を頼りに店の2階で避難生活を送ったということ淡淡と話された。店の壁には1メートルくらいの高さのところに浸水の跡が残されており、カウンターに座る自分の腰のあたりに冷たい感触が走った。大会当日の朝には、海を臨む高台にある日和山公園に登り、旧北上川(ナイル川とは姉妹河川ということ今回のシンポジウムで知った)の河口部とその周辺の光景を目の当たりにして、わかっていたこととはいえ、ことばを失った。震災後2年を経て、がれきのはずで片付けられており、むしろ更地になっていたのだが、かつてそこにあったであろう人びとの生活が、そして命が、陽炎のように意識の中に立ち上がるのをどうしてもおさえることができなかった。その思いは、大会後に坂田先生に案内していただいた女川町の高台でも同じだった。

考えてみれば、戦争や飢餓で荒廃したエチオピアや南スーダンの町や村でも、原因こそ違え、多くの人の命や家屋、家畜、畑が失われ、そこにあった生活が破壊されたという事実がある。人びとの悲しみや絶望、そして復興に向かおうとする気持ちもまた、東北の地とナイル・エチオピア地域の間で共有できるものであるに違いない。数々の難問に対して、国家や行政の立場に関わる方々、NGOやボランティアとして関わる方々、私たちがのような研究者、そして被災された方々が、ともに「共通の地平」(これもシンポジウムで栗本英世先生が話されたことばだ)に立つことが、これら2つの地域の復興に、そしてこれからの人類社会にとって重要だと改めて気づかされた大会だった。

学会の学術大会は、もちろん第一義的には専門領域における最先端の研究による知見を交換する場所であるが、研究心を刺激するのは優れた発表だけではない。よりよい暮らしや未来に向けて奮闘する人びとの情熱に触れたり、同時代に生きることの共感を持ち得たとき、すがすがしい気持ちとともに、自らの研究を前に進める勇気がわいてくる。この地で60年ぶりという4月下旬の積雪とともに、今年の石巻大会を忘れまい。

(まつだ・ひろし/京都文教大学総合社会学部、日本ナイル・エチオピア学会副会長)